昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和二十八年十月十五日印刷（毎月一回・十五日発行）
通第五十五号）

慈光

第五卷　第十號

目次

近角常音先生に別れまつりて……花田正夫…（1）
先生の御葬儀に遭ひ奉りて……三瓶徳英…（4）
近角先生を悼みたてまつる……能戸得一…（7）
近角先生の追憶……園憲章…（8）
大経四十八願講話……福島政雄…（10）

近角常音先生に別れまつりて

花田正夫

昭和二十六年の四月の初めでありました。私がその前年の夏から心臓病で蓬戸不出の生活を続けて居りますことを非常に御心配下さいまして、先生は御自坊の御用を終へられての途次、最早その時分から先生の御健康もすぐれられず、また交通もお難渋な中を、奥様お附添ひで御来庵、種種御慰安下さいました。その節京都の大宇様は先生の御健康を非常に憂慮されましてわざ〳〵名古屋迄御見送り下さいましたことは有難いことでした。

先生の慈顔を拝し、ことに先生の心臓が非常に弱つてゐられる模様を拝見して「私こそ先生を御見舞ひ申さねばならぬ身でありますのに」と非常に恐縮いたしますと「ほんとうに話を聞いてくれる人があれば九州までも行くよ」と軽くお答へ下さいました時、ハッと胸打たれました。外見いかにも靜閑なお生活と拝察される先生の御内心には、身命を捨てゝ惜しまずとの、無限の活動の烈火がひそんでゐられる、そのやむにやまれぬ大悲の切々たるものに触れたのであります。

それは常非な勢で廻転して居る独楽に、一寸でも触れると非常な衝撃をうけるのと同様であります。無限の靜けさの中に、無限の活動がある、無限の活動があるまんま無限の靜寂を保つてゐる、それが佛教の寂靜の真面目と承つて居ります。その生きたまことの姿を先生の上に感佩してハッと驚いたのでありました。これが佛力ひとつに全人格が調伏せられて、そこから反映する靜寂味であります。

さて、その節、私は何だか二度とお目にかゝり難い――それは先生の御健康から推してさういふ心持がいたしましたので名号も御揮毫して頂くと共に短冊をお出し申しますと、しばらく先生は頭を左右に傾けられながら考へて居られましたが、やがて

常觀言

またやりそこなひ、またやりそこなひ、

それだからお呆れないお慈悲でないか。

常音

とすら〳〵と書き流されまして「わたしが兄貴から聞きました中で、二つの大切なことがあります。その一つは何時も聞いて貰つてゐる『我慢のやまぬのが可哀相である』といふことで、今一つがこの短冊に書いたことです」と前置きをされて、次の御経験を打ち明けて、そのお心を伝へて下さいました。

「何時も聞いて貰ふ通り、兄貴のお蔭でやつとお慈悲に氣付き、また請はれるまゝにあちらこちらと法話等も始めました。ところが一つ困つた問題がおきた。それは私の講話を聞いて下さる外部の人達は、非常に喜んでくれるのですが、わたしの家庭の空気がメチャクチャになつたのです。それは私がお慈悲に気付いた頃から、聞け、聞け、と家内にしきりに勧めたのです、いや勧めるといふよりむしろ責め立てたのです。

あとから知らされたことであるが、まことにひどい話で、一分一厘もどうにもならぬ身を、佛はかねて知ろし召されて、凡夫を救済して下さる、それよりほかないのに、『自分はお慈悲に気付いた、お前達も早くこゝまで来い』と責め立てたものだから、相手はたまつたものではありません、そこで家庭の空気が嶮悪になるといふ具合になりました。

さてこのことは家庭内ばかりでなく、沢山な僧侶や宗教家が会合する時などに、口では言はんでも、内心では相手を軽蔑し、へだてる、すると相手もこちらを敬遠し、無視するといふ具合になりました。

一事が萬事です。あらゆる問題につきあたり、五分と五分の争ひをする、さう云う風で全く無茶苦茶な生活になりました。そこで種々と苦労をいたしましたが、良い智慧も出ません。つく〳〵考へて見ますのに、兄貴一家は信心一つで立派にやつてゐるとしか見えないのに、一体自分の昨今の状態はどうしたことであらうか。このまゝ兄と同居して居れば、兄の活動の邪魔になるばかり。ぢやから自分達は一層何処かへ移転して、一生出来損ひで終るほかはないと決心して、兄貴にすべてを打ち明けました。

ところが兄貴が申しますには『お前はさういふことで苦しんで居たのか。我々はな、信心が解つたというてはやりそこなひ、解つたというてはまたやりそこなふ。さういふやりそこなひのやまぬ奴だから、そこを見てとつて何処までもお呆れのないお慈悲である』と聞かせてくれました。

すると今度ばかりは何でも自分の考へ通りに断行すると

まで氣負ひこんでゐた決心が、又候崩れて了うて、大いに自分の非を知らせて貰ひました。

出来そこなひが話を聞いて解つたというて出来そこなひでない様になるのではない。話を聞いて出來そこなひがなほるほどなら今日まで出来そこなひで居るはづはない。どうにもなれぬ出来そこなひ者だから、そこを可哀想と思うて下さるのが佛の大悲といふものです。

元來、どこまでもお呆れのないお慈悲がましますといふことが、こちらが徹底的な出來そこなひの身であるからです。自分はこれから先も、相変らずやりそこなひのやまぬ奴なれども、やりそこなひのやまぬところにお呆れのないお慈悲がある。して見れば私の全体がお慈悲にすつかりおさめとられて出やうがない、さういふ広大無辺な佛の御真実に氣付された。このことは私にとつては有り難いことでしたな。

大略かうしたことを御述懐下いました。そしてしばらく口を閉して居られましたが次に「どうもお慈悲に気付いた人に、二つの大切な氣付があるやうです。兄貴なども二十九歳で気付いたのですが、それからどえらい元氣を出しよつて、大学の卒業試験の頃などはねぢ鉢巻で一升徳利を机の側に据へてやつて居りました。一体どうなることであらうかと思つて居りましたが、半年も経たぬうちに自然にさう云ふ状態はおさまつて平素の兄貴に帰りました。その頃に何か非常に感じたことがあるやうでした」とつけ加へられました。

私はこゝに最近福島先生から承つたことが符合をあはすやうに想ひ浮べられるのであります。それは「信にめざめることを百八十度の転換であると私はよく申して来ましたが、それではどうでせうか。信前はあゝであつた、かうであつた。信にめざめてからかうもなれたあゝもなれた、さういふことでよいのでせうか。ほんたうのことは三百六十度の転換ではないでせうか」といふ意味のお言葉であります。三百六十度に転換しますともとに帰つて了ひます。我共の実際の生活振りを見ますと、信心があるなどとは恥づかしくて言へない、きれいさつぱり何にもない、さういふところに「ひとへに他力にして自力をはなれた、非行、非善の念佛、他力自然の信嘗」がひらけるのであります。

然し私共の実生活は何時も三百六十度に転廻せずに、念佛申せば申したといふことにひつかゝり、有難く思へると思へたといふところにつかまつて、こはばり、りきむといふ風であります。それがやりそこなひのやまぬ姿であり、その脚下が照し出されるにつけても、お呆れのないお慈悲にひきもどされて、こえさせて頂くことであります

私自身、この常音先生のお短冊を机前に毎日拝しながら、濁つた河川が大海にたえず注ぐやうに、三百六十度の転入を無限に被むるのであります。そして長年拝読させて頂いて居ります歎異抄の〃歎異の涙〃といふものも、先生のお導きで始めて、やりそこなひのやまぬ者、即ち異義者にばかりおちて正義者となれぬ私を、責め給はず、呆れ給はず、無限の悲涙を注いで下さる、そのことを知らせて頂いたのであります。

今この原稿を草しながら、瞑目いたしますれば、慈顔、温容は髣髴として眼前に映じ、徳音は深く耳底に殘るのであります。七十一歳の御年をつくして「狂乱の所為多き」御活動を偲び、それでゐられて一片の著書も殘されずにひとすぢに

「このやくざ者を、この出來損ひの奴を、このやりそこなひづめの私を、この我慢のやまぬ身を、誰からも見捨てられる者だから、それが可哀相と云うて下さる、それを見捨てぬと仰せられる、その広大な御真実一つを頂くばかりで、そのほかにはなんにもない、全くのからつぽですのや」

と懇切丁寧に、ほんたうに嚙んでふくめる如く、くり返しまき返し悲引して下されたことであります。

未完

先生の御葬儀に遭ひ奉りて

三瓶德英

昭和二十八年八月六日、近角先生の御往生の事を翌七日信友から承り、驚き、悲しみ、痛ましさ、淋しさで胸一杯になりました。

七日夜のお通夜が、本郷の求道会館の佛龕前、御遺骸の前で、御遺族、御親戚、檀信徒の方々で滿堂の中に行はれました。五対の大花輪と五対の大生花に飾られた御佛前で、僧侶の方々の読経があり、種々の御馳走が出ました。その間信徒の方々が先生をとほして彌陀の大悲に氣づかれた尊い告白やら、家庭問題に就いて救はれた事実などの、他所では聞かれない種々なお話を承り、なかには感きはま

つて語らんとして話り得ず、ただ悲歎の涙にかきくれられたお方も数々ありまして、夜の深まるのも忘れてをりました。數名の方々が立ち帰られるのに誘はれまして私も会館を退出し帰途につきましたが、既に都電もバスもなくなり、お茶の水駅まで徒歩、新宿駅から程近い親戚の家へ行きましたが、丁度富士登山をした直後とて老足はハカバカしく運びませんでした。

八日御葬儀に参列させて頂き、読経告別の式が終りますと御遺骸は、会館の中央におろされ、最後の尊顔を拝しました。御元気な時の御顔とお変りなく、反つて福々しく肥満して居られる様に拝しました。合掌、念佛裡、涙に曇る眼に葬儀の行列を御見送りして帰ります途中、種々の思ひ出が次から次へと涌き起りました。

東京から山陰の片田舎に戦争で疎開して以来ずつと隠居して居ります老納の私が、先生の御葬式に遭ふことが出來ました事は、何としても不思議でたまりません。疎開以來九年目、東京が恋しくなつてふと上京し、求道会館に常音先生をお見舞ひ申したのは七月二十七日でありました。その際は、先生御自身、看病人に先立たれて御元氣に会館後方の入口までお出むかへ下さいました。それから御病室の次の間でお茶をいただき、煙草を喫はうと思ひまして、奥様に「先生は矢張り煙草をお上りですか」とおたずねしますと「喫ひたがるけれど、お医者様が悪いと云はれるので喫ひません」と奥様が仰せられたので、私は喫はずに辞去いたしました。

その時、不治な難儀な御病氣とも知りませず、外見だけから御想像いたしまして、大分お元氣だから、遠からず御全快遊ばして会館の御講話もお始め下さる事と思ひ、もう一度おうかがひして何か記念に揮毫して頂かうと楽しんで居りましたのに、突然御往生と承り、がつかりいたしました。

私は思ひかへしますと昭和九年から十九年まで先生の御世話になり、陰に陽に御援助を蒙り、海岳の鴻恩を受けて居りますのに、山陰地方に飯国已来御無沙汰ばかりして居り、誠に申訳のない忘恩漢であります。今更ながら御慈容、御温顔、御愛語がいよいよ深く胸中に浮ぶ事であります。茲に潜越ながら御許しを願つて、先生の御性格を考へさせて頂きますと先生は同情、敏感、観知、顯察、表裏透視等の御徳を豊かにもたれた方であつたと思ひます。そしてすべての事が自信と教人信が中心であつたと拝察致して居ります。

先生の御信心についてお話下さる時はいつも、兄貴が私

の信仰を気に懸けて、他人に愚痴までこぼしたと聞いて、始めてドコドコまでもお見捨てない大慈悲、広大無辺な御真実といふ事が、肉身の兄貴をとほして肝に銘じ、慚愧と感謝に涙したと常に聞かせて下さいました。

又業報といふことをお話し下さる時は蛇の譬をよく引用されました。「蛇は蛇に生れたくて生れたのではあるまい。蛇に生れねばならぬ業報で蛇に生れて、人から長むしと言はれて嫌はれ、にくまれるのである」と。

又、「友人數人の内、唯一人の友ばかりが、如何なる場合も私を捨てず、何時も離れぬ。他の友人は皆私の剛情にあきれ、我慢をにくんで、相手にせぬ様になつて仕舞つた時、その友が來てさぞ淋しかろう、愚痴も出るだろう、そのお前の性分を知つて居るから、其点を気の毒に思ひ、可哀相で見捨てる事が出來ない。どうかドコまでも一緒に行かうよ、と力づけ励まして下さるのが、善親友たるみ佛である云云。」幾度も幾度も繰り返してお聞かせ下さつた事で、只今の私がそのままお話と符合致して居ります。

よくよく考へますとなみなみならぬ御恩であります。親鸞聖人已来無量な有縁の先達、特に近角常観先生、常音先生が他力信仰に生き抜いて下さつた事は、私の永却に救はるる道を示して下さつた事で、此の上もない嬉しい有難い事でありますのに、それが忘恩痴漢の私には喜べないあさましい実状であります。それにつけましても、歎異抄の九章の、佛かねてしろし召して、喜ぶべき事を喜ばぬ私故、いよいよ往生は一定であるぞとは、あきれかへつた事であります。只念佛させて頂くばかりで、最早何処へも逃げられませぬ。念佛が喜びであり、安心であり、信心でありました。この念佛は定心の念佛でもなく、散心の念佛でもなく、弘願の念佛で、本願他力自然の念佛であります。

無限の功徳、無量の慈愛の法水は、常浚流転の私に濯がれて、昼夜こんこんとして絶へることなく、悪に慣れ易い横着な私、世間に向つて見得を飾つて居る憍慢な私、何も解らないのに文化だ文芸だなどとたわけた事ばかり云うて、不法懈怠な日暮しする私の真の姿を先生のみ教に依つて見せて頂き、そのお陰で大過を逃れ、今日まで無事で生かして頂いたことであります。

常音先生を憶ふとき、亦常観先生の事が思ひ出されるのであります。私ば常観先生の御往生の時、東京に在住して居りました為、昭和十六年十二月三日の晩、御悔みに参

り、六日の晩、本通夜、七日の御葬式に燒香させて頂きましたが、文字通り盛大そのものでありました。

其翌日八日は、早朝大戦の宣戦詔勅の号外が東京、日本、世界に響き渡りまして、人心が驚乱し、落付きのない文字通りのあわただしさに包まれてしまひました。御葬儀が今一日おそかつたら大変だつたと今尚思ひ浮べるのであります。

私は常観先生の御病中の御作の詩の中、次の二首を常に暗誦致して居ります。

除夜

鐘声百八旧年忘　病後身心益健剛

欽仰九旬宗祖壽　老僧三寸白眉長

偶成

露命再回枯草春　園中蚯蚓復吟呻

大潮一滯少欷喜　慚愧名聞利養人

私には常観先生と常音先生が、何時も離れず憶ひ浮ぶのであります。離すことが出来ないのであります。嗚呼、常観先生、常音先生、あのお姿、あのみ声。今もなほありありと脳裏に浮び去来してやみません。先生の還相攝化は、先づ第一に私が蒙つて居ります。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

昭和二十八年八月十九日。　稿。

近角先生を悼み奉る

能戸得一

常音先生の御遺骨の名古屋駅御通過の御時間をお知らせ頂きながら老來とかく異事続出し、此地で遙拜させて頂くことと存じます。誠に申訳ないことであります。

常音先生には私が未だ名古屋に在住して居りました昭和十七、八年が一番御縁深く御慈育を蒙りました。只今も思ひ浮べ家媼と語り合ふことであります。それはその当時の一寸したことで深く教へられた逸事であります。

其時は伊藤寅男法兄のお宅で先生の御宿をして頂いた翌朝でありました。東新町の電停へ御見送り申上げる途上、

先生がフト後を顧みたまひ、突然

『兄貴は罪の深い奴で御座んした』

と言はれました。私は自分の耳を疑ひ、且意外な御言葉に驚き呆れて、思はず先生に近接して「ハアッ」と反問して先生を見上げました。すると

『罪が深うなかつたら、あれだけ一代喜ばれません』

これがその時の御言葉でありました。

愚鈍な私はここに初めて、コレハコレハと領解し、感戴し、途上尚且この御教化を賜はる御慈育を感銘したことでありました。爾来常音先生を想ふ時、必ずこの事が想ひ起されるのであります。

○

八月八日東京の求道会館での御葬儀の日、先生をしのびまつる感歌少々誌されて頂きます。

みはふりの八月八日ひなにゐて

小経誦しつみたまをがみぬ

おんすがたおん言の葉のおのづから

浮び来るなりけふのみ葬(ハフリ)

求道のどもしび高くかかげまして

世の盲冥を照しましけり

妙行をただ一すぢに助けまして

一すぢにただ継がせたまへり

大悪の阿闍世われにはよしあしはなしと

宣らせる大悲歎はも

秋立つを待たで吹き來る風知れと

身をもて示す師の君尊と

近角先生の追憶

園憲章

常音先生の御講話を拜聽された方は誰人でも、恐らくは何度か聽聞されたであらう常の御述懐があります。稚筆な

がら先生の御言葉を拜借して申しませう。

『或時兄貴（常觀先生）が嫂に向つてしみじみと弟（常音先生）を自分は幼少の時から親代りとして育てて来たが、自分としてあれに何の不足もなけれども、ただ弟の我慢の根性のいつまでも〳〵やまぬのが実に可哀相だ』と語つたさうであります。それを嫂から何かの時聞かされて大変驚いた事である。

自分は今日まで兄貴に対して力の限り陰になり陽になつて骨身措まずやつて来た積りだが、弟の我慢の根性のやまぬのは可哀相とは何事か、全く心外に堪えぬ。人の心も知らないでよくもまあえらさうな事が言へたものだ。自分の心を知らぬのも程があると、兄貴の見損ひを、うらみ〳〵にくみ、かなしみもして、遂には兄貴の家を飛び出さうとまで考へた。

斯様に最初は大いに憤慨し、興奮し、さては懊悩、煩悶久しうしてのち、つらつら考へてみるに、自分が兄貴に対し、ああもした、かうもした、人力の限りを尽してゐたなどと思つてゐたことが、そのまま自分の我慢心であつたかといふことに氣付くに當り、かかる剛情、我慢、憍慢、参らせ心の強い自分を見出しました。それにつけても兄貴は、弟に何の不足もなけれども、自分の我慢の根性の止まぬにつけて、蔭ながら始終自分のことを氣にかけて居てくれたことが、つい嫂に語るともなく愚痴となつて洩らされたのであらうその兄貴の深意の程に氣付いた時は、思はず頭ががくりと下りました。

それからのち程、この兄貴の親切がそのまま如来の大慈大悲、偉大な佛の思し召しと喜ばせて頂く様になつた。これ全く現身の兄貴の親切心を身にしんで味はひしそのままが佛智満入の一大動機となりました」

この様に申されたと記憶して居ります。私はかつて東京の求道会館や、江州の御自坊西源寺様で、又は京都の信者の御宅で再三再四おきかせに預つて居りましたが、何時も又、ああ又かと軽くここの処を拜聽して居りましたが、今度先生が御他界遊ばすと、不思議と私の耳の底に留つてゐたこのお詰が急に想ひ出され、勿体ない事であつたとしみじみ味づて居ります。

大無量寿経に「仮令身止　諸苦毒中　我行精進　忍終不悔」とありますが、常觀先生の御往生の後は大戦、敗戦の大混乱の時に、沢山の信者の人生問題について昼夜を分たず、諸の苦毒の中に沒入され、信仰と人生問題を解きに解かれて粉骨細身の大精進と大悲心は終に今度の御発病となり、念佛の息絶え絶られたことと拜するのであります。

回顧いたしますれば明治、大正、昭和の我国の有史以来の大転換期に當り約半世紀に亘りて常觀、常音の両先生は同心一体となり給うて、時に嚴父となり、時に悲母となつて、常に千変萬化の御方便をめぐらして頂き、この未曾有の混迷期にいよいよ帰すべき我等の大道を明示して下さつたものと存じます。

この両先生を想ひ浮べるとすぐ口に浮ぶのが次の御和讃であります。

彌陀　観音　大勢至
大願の船に乗じてぞ
生死の海に浮みつつ
有情をよばうてのせたまふ

大經四十八願講話

福島政雄

第三十は「智弁無窮の願」であります。その国に生れる者は限りない四無碍辯をふるふ智慧を得られるやうにしたいといふことであります。

第三十一は「国土清淨の願」であります。その淨土はきよらかなひかりに満ち充ちて、無数の諸佛方のお淨土が、そのまま鏡に写つたやうに、明瞭に見えるやうにしたいと云ふ願であります。これは味の深いものがあります。無数の諸佛の淨土が鏡に写るやうに明かに見えるとは、無数の古今東西の聖人賢人の尊い教と云つてよい、それが我身を照す鏡として写つて来ることであります。

佛教の世界は実に広大無辺であります。自分が佛教に入ると、孔子、基督、ソクラテス、其他古今東西の聖賢の教が鏡に写るやうにあきらかに顯れて参ります、その鏡に自分の姿が照されて見えて来る。一切を包容してあますところがない、十方世界が悉く私共の道に入る大切な縁となる、さう云ふことであらせたいといふ願であります。これは聖人の御心にはつきり現れて居ります、清淨といふのは

さう云ふことを申すのでありませう。

第三十二は「萬物嚴飾の願」と云はれてをります。淨土の大地や空中にあるものは、宮殿も池も、樹木も、皆限りない芳しい香や宝玉で出来上り、全く類のない美しさで、其等から放つ芳しい香が十方の国に薫つて行き、それを感じた者は、皆佛道を修行するものにさせたいとあります。

これは譬へば次のやうに考へるとわかりますでせう。この一道会館は小さい会館でありましても、それはまことの道を求める、佛のさとりを求める會館でありまして、始めからさう云ふ求道の道場として出來て居ります。それでありますから天井や壁や欄間や疊にまで佛法の香りが滲みこんで居ります。これは大事なことで、その反対に、始め料理屋で酒を飲み、歌を唱うた場所が佛教の会館に変ります と、どんちやんさわぎがしみこんでゐまして、これに佛法の香りをしみこませるには非常な努力と時間がいります。一道会館は始めから佛法の会館で、庭前の樹木まで佛法の香りがしみこんで居りますから、それがここに集まられる方々にしみ込みます。さうですから一道会館のやうなところでお話をすれば、私の話がよくなくても全体がさうでありますから、自然とその香りが十方に薫ずる、さう云ふことをこの願で美しく現はされて居ります。

第三十三は、十方の衆生が阿彌陀佛の光明に照され、信心がひらけると、身の行もやはらぎ、心の煩悩も靜まつて、迷ひのきづなが切れるやうにあらせたいとの願であります。これが「触光柔軟の願」で、大切な願であります。私などには以前から此の願がもつとも深く心にこたへてゐます。然し私の身の行、心の煩悩が仲々靜まりませんが、結局はそこまで行くのであります。歎異抄の十六章に「わろからんにつけても、いよいよ願力を仰ぎまいらせば、自然のことはりにて柔和忍辱の心も出でくべし」といふあそこの味であります。私などには大事な、身にひびく願でありますが、私が現にさうなつてゐるとは申せませんのであります。

第三十四は「聞名得忍の願」であります。どんな衆生でも、名号のいはれを聞いて信じたものは、無生法忍といつて、もう迷を離れた世界を感ずる、そして深い智慧を授ける、そこまで行かせたいといふ願であります。これも大事な願で、前の願と同様重要なものであります。

第三十五は「女人成佛の願」であります。阿彌陀佛の名号のいはれを聞いて、慶んで心に決定する者は、男と同じにこの国に生れて佛となることが出來る、そして女といふ

形もなくなつて了ふやうにしたいとあります。これは大切な問題でありますから後にゆづりませう。

第三十六は「常修梵行の願」であります。十方世界の菩薩が阿彌陀佛の名号を聞くと、阿彌陀佛の淨土に生れて、たえず清い行を身に修めることが出來るやうにしたいとの願であります。ここで十方世界の菩薩とありますが、菩薩といふことであれば、梵行の修行も出来るでありませうが、然し出來ない者もあることで、それが常に修し得るやうにしたいといふ意味があると思ひます。

第三十七は「人天致敬の願」であります。十方世界の衆生が阿彌陀佛の名号を聞き、心から帰依し、信心歓喜し、菩薩の行を身に行ふものは、神々や世の人々から必ず敬はれるやうにしたいとの願であります。成る程その通りでせう、信心の人は尊いといふ感じを持ちます。

第三十八は「衣服随念の願」であります。悟りを開いて婆婆に出られた釈尊が「善く来たなあ」と御讃めになると、自然に弟子となつた者に袈裟がまとひつく様に、淨土に生れる者には、衣服が心のままに現れ、裁縫も洗濯も必要でないやうにしたいと云ふ願であります。これは深く味ふべきことであります。衣服が自然に身につき、裁縫も洗濯もいらぬ、私自身ではよく解りませぬが、此の願には深い意味がありますでせう。この世の些細な経験から考へましても、さういふことになると思ひます。

第三十九は「愛樂無染の願」と申します。その国に生れる者は思ふままの楽を得られる。然し煩悩を断ち切つた人の様に楽に執着しないやうにあらしめたいと願はれるのであります。これは私共の現実の生活と反対であります。私共は楽があると執着し、苦しい時には矢鱈に愚痴を申しますが、淨土では楽を受けながらそれにちつとも執着しないので、まことに貴い境地であります。

第四十は「見諸佛土の願」であります。その国に生れた者が諸佛の淨土を見たいとなれば、阿彌陀佛の淨土の宝樹の間に直ちに現れて、鏡に映るやうにはつきりと見えるやうにしたいと云ふ願であります。これも前に述べましたと同様に味の深いものであります。佛法に徹すれば他の教をも曲つた姿、色眼鏡で見ないで、そのままの姿で見たり感じたりするやうになる。あれはあれ、これはこれで、自分はこれで落着かせて貰うてゐるといふことがはつきりと見えて來るのであります。

第四十一は「具足諸根の願」と申します。阿彌陀佛の名号を聞いた他方の菩薩は身体が片輪で成佛が出來ないといふことはなく、目や耳や鼻などの諸根が完全に具つてゐるものにしたいとの願で、始めの方の願にも同様なのがありますが、ただここでは菩薩となつてをりますから、すぐれた求道者で、一切の衆生とは違ふのでありませう。

第四十二は「住定供佛の願」であります。阿彌陀佛の名号を聞いた菩薩は、清淨解脱三昧と云つて身心共にきよらかになり、心は靜まり、僅かの間に無数の諸佛を供養することが出来るやうにしたい。これも心が純粋になると想像出来ることであります。

第四十三は「生尊貴家の願」であります。阿彌陀佛の名号を聞くことの出来た者は、未來に尊い身分に生れることが出來るやうにしたいとの願であります。この意味は人間の世の中で尊いといふのか、或はそれを超越した意味でせうか多分後者でせうが、私ははつきりとは申しかねます。

第四十四は「具足德本の願」であります。阿彌陀佛の名号を聞いた者は心に慶びがみちて、菩薩の梵行を修して、功德や善根が完全に得られるやうにしたいといふ願であります。佛の御名に功德善根がみちみちてゐて、それを我身にうける、歎異抄の一章にありますやうに「他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なき故に、悪をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐる程の悪なきが故に」の心持であります。

第四十五は「住定見佛の願」と申します。阿彌陀佛の名号を聞いた者は、数へ切れぬ諸佛方を同時に拜むことが出來るといふ普等三昧に始終入つてゐるやうにしたいと云ふ願であります。この願も深い味があります。私共は一方を見ると他方に眼をむけることか出來ません。然しこの三昧では一切の世界を同時に見ることが出來る境地がひらけるのであります。

第四十六は「随意聞法の願」であります。その国に生れた者は、自分の願に從つてどう云ふ教も自然に聞くことが出來るやうにしたいとの願であります。これも佛法の広大さがあらはれて居ります。佛法に徹すればどう云ふ教も無理なしに聞える。佛法に入つてから、あれは聞かぬ、これは見ぬでは一種のとらはれがあります。佛法が身に徹して來るとどんな教を聞いても、夫々の立場において身の鏡となる、斯様な広大な世界がひらけるのであります。その最

もよい手本は華厳経の善財童子の姿であります。

第四十七は「聞名不退の願」であります。阿彌陀佛の名号を聞いて信じたものは、直ぐ不退転に入る、そして決してあとじさりをしない位に入ることが出来る。それは広大な佛のまことに触れたのであるからそこから退くことはあり得ぬことであります。

第四十八は「得三法忍の願」と申されます。阿彌陀佛の名号を聞いた他方佛国の菩薩は、直ぐに音響忍といふさとり、如何なるひびきや音をも自分に受け入れるさとり、次に柔順忍で、心がやはらかになるさとりであります。第三が無生法忍で、もう迷ひの世界にあとがへることの無い位に入り、不退転の身分になる、さういふ風にさせたいといふのであります。さて音響忍とはどう云ふことを聞いてもそれがやはらかに自分に受け容れられるのでありますが、そうなるには柔順忍や無生法忍といふ世界が、心の根抵にあつて始めて出來ることでありませう。

× × × ×

未完

述懐

福島先生

同じ世におなじ佛の胸に生くる久遠の友を
恋ひてさすらふ

しみじみと佛の御名のかよひ来てすさびし
胸のなごみわたれる

過ぎし日も今日も来む日も煩悩の無窮流転
のこの身なりけり

永劫の闇迷ひ行くこの胸にとこしへにひび
くみ佛の御名

苦しみも迷ひも暗もそのままにただ御佛の
胸にささぐる

永劫のまことのいのち御佛の光に融くるこ
の身うれしき

編集後記

九月二十五日、暴風雨の眞中に、近角先生の御遺骨は、御奥様、御息女様、東京の信徒の方々に附添はれたまうて名古屋駅を午後三時半に通過されました。翌朝の新聞では大垣で急行阿蘇は立往生とか。今日御本葬の無事なれとのみ念じて編集後記を誌して居ります。

○

本号は計らずも先生の追悼号のやうになりました。還相の御德香が溢れる感じがいたします。先生が會館にちつと坐つてゐて下さり、私共の動きを常に守護して頂いたのでありますが、今後は私共の中に身心を注ぎ込んで御導き頂くことであります。本号などはその最初の大きな加威力顯現と感佩して居ります

○

▲「御葬儀に遭ひ奉りて」の三瓶老師は島根縣井田局区内井田村に大戦以來疎開して居られたのでありますが、はからずも東京を訪はれて先生の御見舞と御葬儀とにかねて遭はれたので、御因縁の深さ遠さを感佩して居ります。

▲「先生を悼みまつる」の能戸得一翁は岐阜縣今尾局区今尾町に大戦以來御帰りになつた方で、名古屋に御住ひの間、私共の先輩として先生の御縁を共々に喜ばせて頂いた方であります。本年の正月の賀狀では「聞き足らぬ汝なりなほも聞け聞けと七三のよはひまたへる」との歌を以つて信味を送つて下さいました。青年の頃から大切に聞法されて特に常

慈光 第五巻 第九号 昭和二十八年十月十五日 発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

観先生に師事され、其後は常音先生を慕はれた方であります。

▲「先生を偲びて」の園憲章師は私と同年、明治三十七年の生れで滋賀縣能登川局区内佐野の発願寺の御住職であります。御叔父の故那須野一乗師の御導で、御一族御一統の聞法求道は今の時に珍らしいことであります。園師の御兄弟は一人殘らず先生の御教化を蒙つて居られます。地に落ちた種が、秋を送り冬を過して何処にあるか見えませんが、春の光と潤ひを得て芽を出し葉をのばして参ります。蓮の実は何百何千の年を經てもなほ時と所を得ると発芽すると聞きます。誠に有難いことであります。園師の内に生きた眞実のめばえを感じ思はず襟を正さしめられたことであります。

▲福島先生の大經の御講話は四十八願の後半の御略述を頂きました。この願の中で聖人が大切にされました願につきまして、詳しい御信味を次号から掲げさせて頂きます。御住所は横須賀市船越谷戸三の三七であります。

○

私の健康がすこし順調になりましたので、第一、第二、第三の日曜の午後一時半から一道会館で法話会を開き、又毎月二十四日は午前十時と午後一時からの二回を名古屋市内昭和区小楼町教西寺「櫻花女学園の東」で講話させて頂きます。

庭一杯に秋の蟲の声がいたします。秋の七草と共に草木はみのつて参ります。私共も亦みのりの秋を迎へ、白道の旅を急ぎませう。

裏を見せ　表を見せて　散る紅葉　良寛

良書照会

こころ　福島政雄先生著

頒価　一五〇円　送料　十六円

御希望の方は直接、横須賀市船越三の三七の先生に申込み下さい。

昭和二十八年十月　十日印刷
昭和二十八年十月十五日発行
毎月一回十五日発行
定価　一部　十七円（郵税共）
　　半年　百円（郵税共）
　　一年分　二百円（郵税共）

名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　富田隆
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千種印刷所

名古屋市南区駅上町二ノ二八
一道会館
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番